

五野井報告へのコメント

——東京大学史料編纂所編纂『日本関係海外史料
イエズス会日本書翰集』の刊行意義について——

宮崎 賢太郎

五野井隆史氏の報告を聞いて最初に感じたことは、イエズス会はその成立当初から、極めて先端的な「情報通信集団」であって、昨今のインターネット革命による情報化社会の先駆的存在ともいえるべきものであったということである。

一五三八年にイエズス会が創立されると、ただちに翌年にはイタリア国内に在住する者は週に一度、海外に赴いた者は月に一度ローマに報告書を送付することが定められた。この指令は筆不精の者にとっては拷問に近いものであったろう。

こうしてローマのイエズス会本部とローマを遠く離れたイエズス会諸管区の連絡が密接にとられ、総会長の許に強力な一元的宣教体制が構築された。他の管区の活躍を知ることによって、自分の属する管区においても、一層布教の進展に邁進するよう鼓舞されたことであろう。そのためか、教化に役立つことに関することのみ取上げ、教化に役立たないことは報告書の中には書かないように指示されている。

もともとこのような性格をもつイエズス会通信がローマにおいて検閲を受け、一般に公刊されるようになると、さらに教化にとつて不都合な個所は削除され、イエズス会の華々しい活躍の姿のみが強調されることになった。真実の歴史を物語る彼らの人間的な部分はまったく見えてこない恨みがある。

一九八九年から東京大学史料編纂所海外史料室において編纂が開始された『イエズス会日本書翰集』の原文篇と訳文篇の刊行はこの恨みを可

能な限り拭い去り、最良の底本に基づいて諸本と比較校訂し、極力原文に忠実な日本語訳文を刊行されていることは、キリシタン研究者にとつてこの上ない喜びであり、その意義は計り知れないものがある。

三〇年前の学生時代の私のキリシタン研究を振り返っても、まず史料として手にしたものは、村上直次郎訳のエボラ版書簡集の翻訳である『耶穌会士日本通信』および『イエズス会日本年報』（異国叢書、新異国叢書等）、柳谷武夫訳フロイスの『日本史』全五巻（東洋文庫）、後に松田毅一・川崎桃田訳の『日本史』全二巻（中央公論社版）、バジェスの『日本切支丹宗門史』全三巻（岩波文庫）であり、通史としては姉崎正治の『切支丹伝道の興廃』であった。もしその当時、東京大学史料編纂所の『イエズス会日本書翰集』のようなものがすでに刊行されていたならば、つたない私の研究もどれほどかましなものであったろうかと思われる。わが国におけるキリシタン研究の蓄積を考えれば、今回の史料編纂所の刊行事業はむしろ遅きに失した感がある。

日本におけるキリシタン研究の跡を振り返ってみると、第一期黄金期は大正末期から昭和初期にかけての姉崎正治のいわゆるキリシタン五部書である。バジェスを中心としてデルプラス、シャルボア等の刊本を欧文史料として駆使し、日本側の文献史料や伝承も丹念に拾っている。第二期黄金期は岡本良知、海老沢有道、松田毅一氏等による原典研究への目覚めである。それは国内においてはフーベルト・チースリク、アルヴァレス・タラドゥリス、パチエコ・デイエゴ氏等、海外ではローマのイエズス会歴史研究所日本部の研究員ゲオルグ・シユールハマー、ヨーゼフ・ヴィツキ、ヨーゼフ・シユツテ、ロベス・ガイ、およびチャールズ・ボクサー氏等による原史料に基づく研究に大いに刺激を受けたものであった。

日本人で本格的にイエズス会文書を中心として原典に基づくキリシタ

ン研究を開始したのは、高瀬弘一郎、五野井隆史、岸野久氏等である。最近の残念な傾向は、その後を受け継ぐ若手の世代が育っていない、というよりはキリシタン研究に対する関心そのものが希薄化しつつあるように見受けられることである。若手のホープと目されていた柳田利夫氏は、イエズス会関係の優れた業績を出し始めた途端、キリシタン研究から身をひいてしまった。その他に高橋裕史、浅見雅一氏等が気鋭の研究者として頑張っているが、まとまった研究者グループを形成するにはいたっていない。

これまでキリシタン研究は東京の「キリシタン文化研究会」を中心に進められてきたが、最近はその活動も停滞しているといわざるをえない。むしろ地方の名古屋キリシタン文化研究会が青山玄師を中心として活発な研究を行っていたが、それも平成一一年に青山師が引退し解散となった。私自身も文献によるキリシタン時代の研究からは遠ざかり、現存する長崎県下のカクレキリシタンの調査研究に専念している。

このことは人々がキリシタンに対する興味関心を失ないつつあるのではなく、ましてや日本の歴史や文化におけるキリシタンの持つ意義が低下したためではない。一九九七年の二十六聖人殉教四〇〇周年記念祭や一九九九年のザビエル渡来四五〇周年記念祭など全国的な盛り上がりを見せ、天正少年使節や遠藤周作の小説『沈黙』などがオペラ化され好評を博している。カクレキリシタンも相変わらずの人気で、昨年のゴールデンウィークには生月島の信徒たちが三度目の東京国立劇場でのオラシヨ公演会を開いている。

若者のキリシタン研究離れの要因は、労なくして何でも、何時でも、手近かにそろうコンビニ時代に育ったことにも起因していると思われる。日本におけるキリシタン研究が刊本による時代の幕を閉じ、原史料に依拠する時代に突入したのはよかったが、逆に生半可なことでキリシタ

ン研究のプロとはなれなくなったのである。キリシタン関係原文書はポルトガル語、スペイン語、イタリア語、ラテン語と多岐にわたり、それもいまだ近代的な言語となる以前の言うならば古語である。それらの文書解読能力の涵養には気の遠くなるような時間と努力を要し、それに耐えうる忍耐力のある若者がいなくなつたということである。

さらに関係の研究書を十分に参照しようとすれば、英・独・仏語が要求され、日本の近世の古文書解読能力も必要である。キリシタン研究のプロ以外の者がキリシタン研究に近づくためには、信頼するに足るテキストとその忠実な翻刻と翻訳が不可欠となるのである。しかし、それは一人の個人が到底なせる業ではなく、組織的な取り組みが求められる。まさに東京大学史料編纂所の『イエズス会日本書翰集』の刊行はそのような必要性に因應るべく真正面から取り組む事業であるといえよう。その成果が刺激となつて、第三期の黄金期を迎えるきっかけとなることを心から期待するものである。

そのためには現在の作業ペースを格段に引き上げる必要がある。一九九〇年から二〇〇〇年の十年間に、天文一六年から天文二二年までの五年間分を扱った原文編が二冊、翻訳編が四冊刊行されたが、このペースでいけば、当初の計画である一五七九年度までの刊行を終えるのは二〇三〇年頃になる。

東京大学史料編纂所の特殊史料部海外史料室がもしこの事業の重要性を自ら認め、あるいは他から認められ、本格的に推進するとするならば、少なくとも(1)イエズス会日本通信・イエズス会日本年報(2)一五七九年以降一六四〇年頃までのイエズス会会員個人書翰・イエズス会関係係教報告(3)フランシスコ会・ドミニコ会・アウグスチノ会関係文書の三セクシヨンが同時進行していくことが切に望まれる。さもなくば、二一世紀中に基本文献の邦訳を手にすることは望むべくもない。

この基礎作業が完成して初めて、キリシタン研究は限られたごく一部の内外古文書解読能力を有するプロの手を離れ、キリシタン研究の最終的な目的である日本人はいかにキリスト教を理解し、受容、変容させて土着化させたのかというテーマに多くの人々が取り組むことが可能になる。また、これまでのキリシタン布教史を中心とした狭い研究から、もっと幅広い日本史、宗教学、経済史、政治史、文化史研究といった分野の研究者の関心を集め、当該学問分野の飛躍的發展に寄与することになる。

質議応答

村井章介（東京大学大学院人文社会系研究科）

本報告では、イエズス会士による書翰や報告書の著述の目的が「教化に役立つ」ものを執筆することであり、それ以外の内容は書かないことが指摘されている。その結果、ヴァリニャーノは著述による理解と実態とのギャップに驚いたということである。イエズス会士の書翰や報告書は、専門外の研究者からは外からの眼で見た史料として使われがちであるが、実際に史料として使う際に、そうした偏りをどの様に補正すべきなのであろうか？ 何らかの史料批判が必要となるのではないかと思われる。例えば、日本人の質は、キリスト教を受容するためには十分に高いとするザビエルの書翰に見られる見解を「客観的」であると見做し、そのまま受け取ることはできるのであろうか？ 日本の社会については敢えて歪曲する必要はなかったとする本報告の最初の説明とは、矛盾しているように思われる。

五野井

書翰の内容は確かに取捨選択されていた。イエズス会と日本との関わりから、不都合なことは書けなかっただろう。ザビエルの鹿児島における第一印象は直感的な好印象が述べられているが、後に都や山口を知ることでは正されている。例えば、日本人の主従関係は、日本人が名誉を重んじることから厳格で裏切りはないとされていたことは、その後の報告では下剋上の実態を見るようになって敢えて触れられなくなっている。刑罰が厳しいために主人に従わなければならなかったという認識が変わっている。確かに、場合によっては、日本の為政者に対する配慮はあったかも知れない。

米谷均（日本学術振興会）

次の二点を質問したい。

①一五八七年の場合など、なぜ複数の『日本年報』が存在するのか？

②イエズス会以外の修道会の通信システムはどの様なものであったのか？

五野井

質問の順序に従って答えたい。

①日本の政治状況の変転が激しく、年に一冊の年報では対応できなかったであろう。地域ごとに分けて作成されているだけでなく、迫害などの記述は時間の経過に従って執筆されている。こうした事情に加えて、年報作成者であったフロイスが多筆であったことも影響していると考えられる。

②スペイン系托鉢修道会の場合、個人の書翰が殆んどであり、年報が組織的に作成されることはなかったように思う。ドミニコ会のフィリピン聖ロザリオ管区では、イエズス会の通信制度を真似て年報を作成している。時代は下るが、パリ外国宣教会でも年報を作成したと聞いている。

ルイズ・デ・メデイナ

五野井氏の回答に若干の追加説明をしたい。イエズス会以外の修道会が来日したのは一五九〇年代からであり、それまで四〇年以上に亘ってイエズス会が日本布教を担当していた。それ故、イエズス会は、他の修道会よりも通信制度が発達していた。本報告は、ヴァリニャーノが制度として整備した年報をテーマとしているが、年報という形式でなくても「総合書翰」*Cartas Generales* と呼ばれる類似の内容を持つものがある。例えば、ルイス・デ・アルメイダやガスパル・ヴィレラ等の書翰がこれに相当する。こうした書翰にも、日本の社会についての記述が見られるので、その内容に対しては年報と同様の問題点が指摘できるであろう。

清水紘一（中央大学文学部）

本報告のテーマからは少し外れるが、天正一五年に発布されたバテレン追放令の朱印状二通など、日本語で記された文書類はどうなってしまったのであろうか？ 現在、こうした文書が南欧のどこかに所蔵されている可能性はあるのだろうか？

五野井

バテレン追放令二通の内、一通はバードレに渡し、もう一通はポルトガル船船長を介して本国に送付されたように思われる。大名が発給した布教許可状も含めて、ゴアに届いたことが確認されるものはあるが、その後の行方は分からない。大道寺の文書のように、ポルトガルで印刷されているものもあるので、ポルトガルに届いた日本語の文書は存在するのであろう。断言はできないが、ポルトガルやスペインの文書館などに埋もれている可能性はあると思う。しかし、未調査段階でもあるので、そういう史料は現存していないことを前提として研究している。